

## 研究課題：「認知症高齢者の社会関係の交差分析による量的・質的評価研究」

### —『暮らしの行為者』の視点からの哲学的アプローチ

代表研究者：平塚 良子(大分大学大学院福祉社会科学部 教授)

#### 1. 研究の意義・目的

本研究の契機は、身体の医療化が進行する現代社会の中で、「認知症高齢者」が人間として矮小化されてきていることへの危機感が発端となっている。それゆえ、認知症高齢者の人間像を、病や障がいを感じながらも自らの生を主体的に全うしていく存在と仮定している。すなわち、当該高齢者が喜怒哀楽を経験しながら「暮らしの行為者」としての主体的な営み、特に他者との多様な社会関係のありよう、本人の住む世界を写し出し、人間存在の生とは何かを明らかにすることを目的とした。それは認知症高齢者の人間群像を活写することで、人間観の転換をはかり、社会における認知症高齢者、さらにはケアに有用な示唆をもたらす。

#### 2. 本研究における研究方法

本研究では、認知症とともに生きる人間存在の生の本質—その世界像・人間群像の明示を試みる。このような「生」の本質への接近を特に「哲学的アプローチ」と称している。具体的には、認知症高齢者の「暮らし」が「人間：環境」という社会関係において成り立つという観点に基づいている。すなわち、①他者への主体的な発信である本人の「暮らしの中の語り」(暮らし行為)の分析、②人間と周囲の世界(環境)との間で織りなされる生活のさまを表す関係図式であるエコマップと③②をもとに作成した評価表を用いた他者(人、モノ、サービスや制度等)との関係の分析を行う。これら3つのタイプの分析結果の交差により、認知症高齢者と周囲の世界との間の相互作用により形成される社会関係を近接(クローズアップ)した。なお、分析にはサンプル数は少ないが可能な範囲での定量的分析を実施し、これと共に定性的分析を用いている。加えて異なる分析法を交差する試みをしている。

#### 3. 調査の概要

(1) 具体的な研究手続き：認知症高齢者の入所や通所型介護施設職員の協力を得て認知症高齢者に関するデータを収集、分析した。調査先は九州内5法人8施設の入所型と通所型(短期入所生活介護含む)である。協力職員はソーシャルワーカーとケアワーカー各1名がペアとなり計18名の職員が調査対象者30名(入所者15名、通所者15名)を選んだ。女性25名、男性5名であった。2009年3月～8月計24週を調査期間とした。4週の間には2場面を抽出し予備を含めて1名につき12場面のデータ作成の依頼をした。ここでいうデータとは①高齢者の語りカード、②エコマップ、③評価表である。これら3つ1組をデータとした。これに初回時に各高齢者の基本情報の提供を受けた(フェイスシート)。なお調査実施前に予備調査を実施すると共に、法人毎に2名の職員代表の参加を得て説明会を行った。データは1月毎に回収し、必要に応じて研究分担者が相談に応ずる体制を取った。

(2) データの回収：モニタリングによるリライト依頼と仮定資料作成のシステムを導入し、データの精査体制を整えた。データの収集が同時・一律に揃わない遅滞状況が起きたが、語り成立カードは274事例となった。リライトデータが期間を過ぎても回収できなかった2名をのぞき28名を分析対象とした。要介護度3,4,5が21名、認知症日常生活自立度もⅢa,Ⅲb,Ⅳが合計21名で重度化している。本研究では語りとして成立したカードの収集が重要であることから、また、調査協力者の負担軽減のためにもエコマップと評価表については研究チームで仮定資料を作成し、これを職員が確認する方式とした。これらに時間を要したことで、評価表については試論的な提示に止まるところとなった。なお、データ収集、公表においては倫理的配慮を行った。

#### 4. データ分析の観点

1) 「語り」(語る行為)：他者に対する働きかけとしての表出的ことば(非言語的行動含む)をさし、何かについての本人なりの意思表示(感情、思い、理屈=論理)である。語り分析の枠組は①状況察知・認識、②社会関係、③ドラマとし、語りの成立条件を設定した。

2) 環境との関係：語り場面に登場する環境との関係を①前景的社会関係、②その背後にある環

境との関係を後景的社会関係とした。

3) 語りの量的分析項目：①語られる内容（時間関連、生活歴の反映）、②語りの量、③語り成立レベル（4レベル）、④状況察知・認識、⑤社会関係／環境の分類／意味内容の共有／滋養的環境世界の成立）、⑥ドラマ：了解可能性、語り場面のまとまり、として構成した。

4) エコマップ評価表：ストレス、コンピテンス（周囲の環境に働きかけ、環境を活用する能力）、有益、有害、支援、方向、持続、接触頻度、拘束、信頼、満足の11項目とした。

## 5. 語り分析：暮らしを語る認知症高齢者の主体性の発揮に関するデータの詳細

### (1) 語りデータ全体の概要

語り成立の有効データ数は 274 場面（欠損値 1）であった。内訳は、成立している 235、やや成立 33、どうにか成立 5 であった。認知症高齢者の語りは、時制でいえば、現在世界の語りを中心としていることがわかった。273 場面中、232 場面（84.9%）である。それは現在世界の文脈のもとでの語りということである。語り成立データと滋養的環境世界の成立をクロス集計した結果、語り成立レベルのうち、最も高い「成立している」データと、「滋養的環境世界の成立」の双方を満たす場面は 91.2%（166 場面）である。なお、滋養的環境とは、「本人にとって応答的であり、本人の生活を利する環境」を意味する。この 166 場面のうち、語り始めが「本人」または「他者」で、かつ生活歴が反映したか否かを含むデータは、87 場面である（表 I）。

本報告では、語り始めが「本人」で、「生活歴が反映」している 39 場面に着目する。

表 I 語り始めと生活歴の反映の有無の場面数

語りはじめ／生活歴反映の有無	生活歴反映あり	生活歴反映なし
本人	39 場面	30 場面
他者	48 場面	23 場面
計	87 場面	53 場面

### (2) 語りデータの成立に見られる特徴的パターン—あるケースから—

ここでは認知症高齢者本人から語り始めた場面が最も多かった A さんの 8 場面を分析する。本人が自ら語り始め生活歴の反映がみられるところに、主体性発揮の特徴的なパターンと仮定する。

#### 1) 利用者 No. 1（以下、A さんで明記）

ケース概要：（81 歳、男性、要介護 4、認知症日常生活自立度 IV、入所型利用）

退職後、妻と共に有料老人ホームに入居するが、トイレの場所がわからなくなる。精神病院入院を経てグループホーム入居に至る。会話はかみ合わないが社会的にふるまう。一人で外出し、行方不明になることあり。服を脱ぐことはできるが着ることは困難。

表 II A さんの生活歴に依拠した場と設定及び時間との関係

	生活歴との関係	場と設定	時間
3月①	職歴：教師時代	他の利用者を教え子と捉える	現在世界を職業場面と認識
3月②	家族：妻と有料老人ホーム入居	認知症発症に伴い退去した妻との再会に要望し、再会する	現在世界で妻と離れて暮らすことを認識
4月①	趣味・嗜好：尊敬する歌手	歌手の記念館見学、感想述べる	過去から継続する嗜好性認識
5月①	家族：家族と離れて暮らす	他の利用者に不満を述べる	家族と離れて暮らすことを認識
5月②	職業歴：教師時代	A 施設職員の就職を心配される	現在世界を職業場面と認識
6月②	職業歴：教師時代	神社の参拝場面で、他者を思いやる気持ち述べる	過去の職業経験が、現在の生活世界の他者を通じて表出
8月①	家族関係：自宅（建物）	「売り物件」の元自宅を訪問	モノ（建物）と生活経験を述べる
8月②	社会サービス関係： 妻と入居していたホーム	妻が入居する有料老人ホームを訪問し、職員に声をかけられる	「生徒ではないが、とても気持ちのいい男性」と人物認識

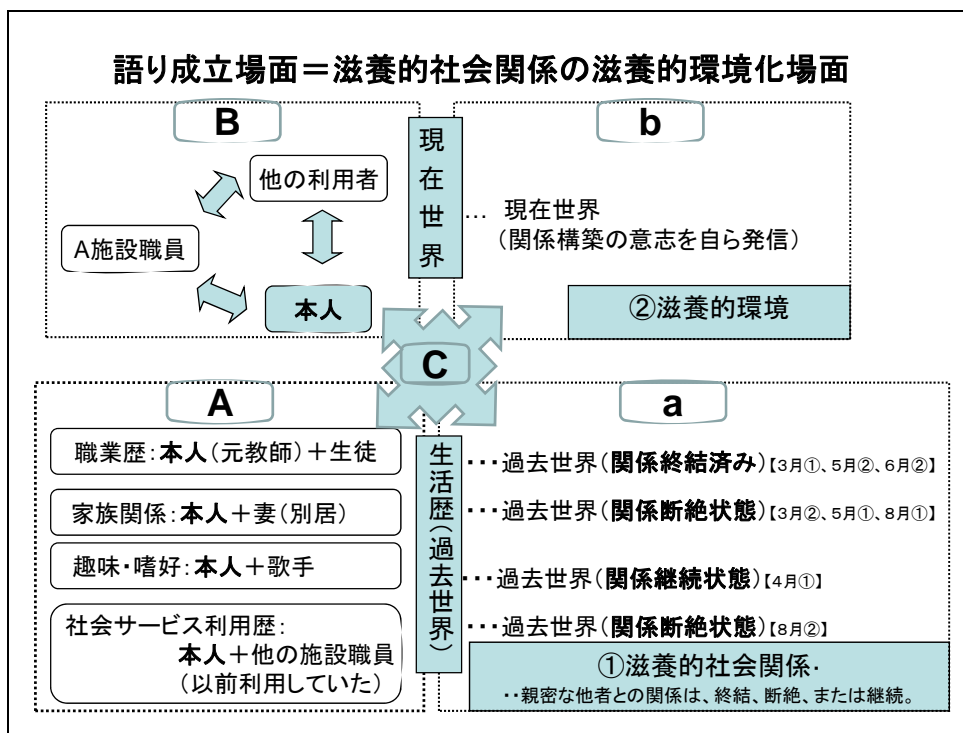
#### 2) 滋養的社会的関係の滋養的環境化

図 I には、滋養的社会的関係が滋養的環境化している連関図を示している。図中 A 及び a には、語りの中で話題になった生活歴の詳細を示している。

職業歴との関係では、職業上関係のあった自分と他者との関係（教師と生徒という関係）が、現在世界（職員と利用者、他の利用者という設定）で表出している。現在世界で対面する他者（職

員と他の利用者)は、過去世界に存在した(生徒)として本人には映っている(3月①場面)。過去の職業的な関係は既に終結しているにもかかわらず、本人は、関係が終結した過去世界に滋養的  
 社会関係を見だし、現在世界の関係に重ね合わせていると考えられる。家族関係については、  
 Aさんは、親密な他者(妻との関係)については、過去と現在と連続的に認識している。例えば、  
 妻と離れて暮らしていることを認識し、会いに行きたいと訴える(3月②場面)。また、家族と暮ら  
 せない現実を「家族とは、一緒に住むもんじじゃないの…?私がかうやって悩んでいるのかおかし  
 いですか?」と問いかける(5月①場面)。施設入所は、家族との関係を時に断絶する契機になる。  
 認知症高齢者は、こういった関係断絶状態を認識し、他者に関係継続性の重要性を訴えかけてい  
 る。一方、長年親しんできた趣味や嗜好には、他者が認知症高齢者の滋養的  
 社会関係を認識し続  
 けていることを知る手がかりがある。例えば、Aさんは、親しんできた歌手の記念館を見学する  
 支援をうけ、歌詞だけでなく、歌手自身の人間性に共感を覚えると述べている(4月①場面)。

図 I 滋養的  
 社会関係の滋養的  
 環境化に関する連関図



以上のことから、滋養的  
 社会関係の滋養的  
 環境化を次のように考える。

- ・語る主体である認知症高齢者は、自身が生きてきた過去世界(生活歴)に親密な他者の存在を見いだしている。この親密な他者との関係は、滋養的  
 社会関係と仮定できる。(図 I の A)
- ・認知症高齢者は、現在世界を生きる生活場面で出会う、新たな他者との関係を、過去の親密な関係と重ね合わせて認識している。(図 I の a → b)
- ・過去の親密な他者との関係の深さは、関わりあった時間と平行で、家族や長年親しんだ趣味などとの関係の断絶は強く認識される。関わりの時間が短い他者の存在は曖昧な表現で表出される。(例: 図 I の A の社会サービス利用歴)
- ・生活歴に依拠した本人発信の語りは、それに応ずる環境側の場と設定によって滋養的  
 環境化に至る。それは、生活歴に依拠した語りに含まれる親密な関係の継続ないし、関係の再構築のニーズである。ニーズに応じた場と設定の支援は、親密な関係を現在世界で認識し、安心を感じることにつながる(図 I の B)。
- ・滋養的  
 社会関係の滋養的  
 環境化は、生活歴に含まれる過去の親密な関係の現在世界との重ね合わせ、過去と現在の鏡面的な相互関係を企図した実践によって具体化される。(図 I の C)

(3) 語りの内容から見える認知症高齢者の「本心」—その人間群像—

上記のケースは、本人からの言語発信による語りの内容から見えた過去世界像、その中での社会関係を象徴的に現在世界に強く投影させているケースである。それは現在世界における戸惑いや苦悩を本人なりに解決しようとする創造的な力の発揮との見方もできる。こうしたケースは本研究では他者を契機にして語りが始まる場合にも多く見られるパターンである。

語り内容は、概ね、①日常的一般的なやりとり型と②内面的世界の吐露型とに大別される。後者では、認知症高齢者なりの心情や考えなど意思が明確に示される。例えば、現在の多様な対象に対する不満、怒り、嘆きや悲しみ、自身の老いや世話される身の悲哀、他者である「ぼけ」を生きる人からの影響、仄めく死の予感、幸福と苦悩の交錯、喜び、楽しみや感謝、自閉的側面などが見られる。同一高齢者の語りにはあるまとまりをもった論理的な特徴が見いだせた。これらから認知症高齢者は他者をよく認識しており、他者との相互作用を通して自他間において社会関係を形成し、そこに意味の世界が出現し、そうした環境世界のなかで生きている。

## 6. エコマップと評価表の分析

### (1) エコマップから見る認知症高齢者の語りと社会関係

エコマップは人と環境とで構成される世界の全体像と関係像を描いたものであり、利用者のおかれている状況を視覚的に描くことができる認識道具である。今回、高齢者の主体的な語り場面をエコマップで図示することにより、高齢者が今まさにいる世界を浮かび上がらせることができた。そして、作成したエコマップをもとに、高齢者と、インフォーマル系、フォーマル系、物理的環境、その他の4つに分類された環境との関係性について、①どのような環境と相互作用が見られるか、そして②相互作用の元で形成される関係にどのような性質が見られるか、といった観点から分析を行った。また、エコマップを分析する今一つの観点として、「前景的環境」と「後景的環境」を設定した。前景的環境とは、その語り場面に登場する環境である。一方、後景的環境は、例えば、家族や社会制度、趣味や嗜好など、前景的環境としては登場しないが、場面の背景として存在する環境である。エコマップの分析から、認知症高齢者と社会関係の関係性には以下の3つの類型を見てとることができた。

- ・類型1 趣味・嗜好を媒介として認知症高齢者と環境が互いに了解しあった現在の意味世界で交流しあう関係
- ・類型2 認知症高齢者の意味世界を環境側が現在の意味世界で調整する関係
- ・類型3 環境が呈する意味世界を認知症高齢者が了解し対処する関係

このパターンは、認知症高齢者が自分の意味世界の表れとしての主体的語りを環境との関係においてどのように表現するのかということ、そして環境側がそれをどのように受け止めるのかという点において成立するものであり、環境側が認知症高齢者の語りをどのように受け止めるかによって、その後の関係性は変化することが示されているといえる。

### (2) エコマップと評価表の関連性

エコマップ作成時には、同時に、認知症高齢者と環境の関係性をストレス、コンピテンスなどの項目から評定をし、この評定点を SPSS の多重応答分析により分析を行った。結果、その語り場面を構成する環境が、類似した性質をもつ環境と近接する形で座標上に布置された。また、座標軸が説明する項目を読み解くことで、それぞれの環境の性質が示唆されることを見いだした。

エコマップは、その人を取り巻く環境を「関係の質」という観点で図示することができ、環境は物理的な場を一つのまとまりとして表記されることが多い。しかしながら、今回の分析では機能的性質の類似性によって環境が分類されることから、これをエコマップ的観点に立って考えるならば、認知症高齢者の社会関係は、物理的場のまとまりではなく機能的性質の類似性という側面からも把握できることが示唆される。認知症高齢者の関係性を理解する際には、本人の置かれている場のみならず、本人に働きかけている環境の性質にも着目するが重要であるといえる。

## 7. まとめ

本研究からは、人生の喜怒哀楽を主体的に語る認知症高齢者の人間像、これらの人々が過去や現在をいかに知覚・認識しているか、また、高齢者に接する家族や施設と職員、同じ立場の利用者や近隣関係者などと織りなされる多様な社会関係形成の様態から、本人にとって意味ある環境世界の存在を明らかにできた。そして各人各様の人間像を見出すことができたが、そこにはケアされ保護されるだけの高齢者ではなく、能動的な人間存在と本人なりの論理と老知・老かいらさをもった人間群像が共通して登場しているのである。なお、本研究の課題としては、28名・274場面という分析対象数では定量的な研究方法からいえば、結果の一般化は困難と言わねばならない。しかし、本研究で量的・質的分析の交差、質的分析同士の交差分析手法を採用して得られた結果に一致部分や整合性を見ることができた点は意味がある。